

# 二つのゴルバチョフ論

(上)

塩川伸明

ソ連解体と同時にゴルバチョフがソ連大統領を退陣してから、約七年の歳月が過ぎ去った。その後のロシアでは次々と新しい事態が起きて、ゴルバチョフとペレストロイカは、今や遠い過去のことのようにみえるに至っている。この間、ロシアではペレストロイカに関係した多くの人が各種の回想類を出版し、当時の状況をそれぞれの見地から描き出して、歴史研究への素材を提供しているが、その多くは、今なお政治に関与している人によって現実政治的な思惑をもって書かれた「生臭い」ものであり、引退した人の書く回想に比べると、「歴史への証言」というよりも「政治パンフレット」的な色彩が濃い。

他方、日本を含む外部世界ではペレストロイカおよびゴルバチョフは過去のこととして忘れ去られる傾向が強い。そういう中で、イギリスとアメリカを代表するソ連・ロシア政治研究者二人によって、相次いで重厚なゴルバチョフ論が刊行されたことは注目に値する。一つはイギリスの政治学者アーチー・ブラウンの *The Gorbachev Factor*, Oxford University Press, 1996

であり、もう一つはアメリカの政治学者ジェリー・ハフの *Democratization and Revolution in the USSR, 1985-1991*, Brookings Institution Press, 1997 である。ともに、近年刊行された多数の回想や著者自身が関係者に行なったインタビューなど豊富な情報に基づき、また欧米の各種政治学理論を駆使して、独自のゴルバチョフ像を描き出している。この小文では、この二著を手がかりにして、ゴルバチョフとペレストロイカが今日どのような振り返られているかについて考えてみたい。

\*

ハフは一九三五年生まれ、ブラウンは一九三八年生まれで、二人の著者はほぼ同世代に属する。冷戦期の欧米で盛んだった反共イデオロギー色の濃いソ連研究から距離をおいた新しい研究の流れを一九七〇―八〇年代に形づくり、今では大家としての位置を占めるに至った世代である。この二人はまた、ブレジネフ末期に逸早くゴルバチョフという若手政治家に注目し、彼

UP 1999年1月号

の台頭を予言した数少ない専門家という点でも共通する。おそらく、ゴルバチョフの興隆と失脚を見届けた後に彼らがゴルバチョフ論を書こうと思いたったのも、そうした自らの研究歴と関係があるだろう。

こうした共通性があるとはいえ、二著のゴルバチョフ評価はおよそ対照的である。ブラウンがゴルバチョフを今なお高く評価するのに対して、ハフのゴルバチョフ評価は手厳しい。かつてゴルバチョフに強い期待を寄せた者として、その期待が裏切られたことへの幻滅を表出しているかの如くである。もつとも、二著とも政治評論ではなく学術書であるから、そういった評価ばかりがこれらの書物の中心を占めているわけではない。先に書いたのは、話を分かりやすくするために敢えて行なった単純化である。しかし、それにしても、「学術書にしては、必ずしも常に冷静でなく、ところどころに感情論がにじみ出ている」という印象を与えることは否みがない。もはや歴史になりつつあるとはいっても、まだ完全に距離をおいた歴史になりきっていない。

ない対象を論じるときには、このような感情論の表出はある程度まで自然なことなのかもしれない。

もう一つ付け加えるなら、ゴルバチョフ評価では対照的な二人も、エリツイン現政権下における「民主化」の進行を極めて厳しく評価する点ではほぼ一致している。ブラウンは、だからそういうエリツインよりもゴルバチョフの方がよかったという素直な見解を示唆するのに対し、ハフは、そういうエリツインに負けてしまったゴルバチョフの不甲斐なさを嘆くかの如くである。

\*

二著のうちでは、ブラウンの方が分かりやすい。破壊とテマゴギーをこととするエリツインに対して、理性を信じて漸進的改革を目指したゴルバチョフを高く買い、歴史に見捨てられたかにみえる彼を名誉回復しようというのが基本的な姿勢となっている。

## 彩流社

### ▼第2期マーク・トウエインコレクション全十巻刊行開始！

# 西部放浪記

(上・下)

木内徹・吉田映子訳 ヘンリー・B・ウオナム解説  
ゴールド・ラッシュに沸き、バブルに躍らされる十九世紀の西部の町と、五年半に及ぶ自らの放浪生活を描く自伝的作品。▼初の全訳！ 各2500円

第1期コレクション

全十巻十三冊好評発売中！  
▼セット価格 31180円

## メアリ・パートン

E.ギャスケル著 松原恭子+林芳子訳  
ヴィクトリア朝初期の下層社会の  
実情を鮮やかに描いた文学史に残る「社会小説」。 4500円

## D.H.ロレンス戯曲集

—Three Plays

白井俊隆ほか訳 「炭坑夫の金曜日  
の夜」本邦初訳の二篇「嫉」  
ルドイド夫人やもめになる」の珠  
玉の三篇を取録。 3200円

## 『カンタベリー物語』 の語り

佐藤勉著 中世ヨーロッパ文学  
の巨大な記念碑「カンタベリー  
物語」の世界を読み解く斬新な  
論考！ 2800円

## C.S.ルイス 文学案内事典

ウォルター・フーパー著 山形和  
美監訳 C.S.ルイスの全貌を取め  
た“読む事典”の決定版！  
◆生誕百周年記念出版！ 18000円

## ロジャー・ウィリアムズ

—ニューイングランドの政教分  
離と異文化共存 久保田泰夫著  
植民地時代アメリカの指導者にし  
て聖職者の業績を再評価する、初  
の本格評伝。 6000円

〒102-0071千代田区富士見2-2-2

☎ 03-3234-5931 <価格税別>

fax 03-3234-5932 目録送呈

もつとも、このような評価は、「ゴルバチョフは社会主義にこだわり、徹底した改革を進めることをためらったのではないか」という見解に立つ人から見れば、理解しがたいとされるだろう。そのような見解からすれば、エリツインこそが、たとえどんなに批判の余地のある政治家だとしても、とにかく徹底した改革推進の頂点に立ち得た唯一の指導者であり、ゴルバチョフの「漸進的改革」とは中途半端さ、不十分性、保守勢力との妥協の別名に他ならないということになるからである。ブラウンはそうした評価がありうることを十分念頭において、まさにそのような見解に反論することを課題としている。ゴルバチョフが社会主義にこだわっているかみえたのは、保守派からの反撥を最小限に抑えるための戦術的配慮の産物に過ぎず、彼自身の「社会主義」とは、本来の意味での共産主義ではなく、事実上の社会民主主義化を遂げていたというのがブラウンの見方である。彼はゴルバチョフの各種発言を丹念に調べて、「社会主義へのこだわり」と解釈されがちな発言の多くが、むしろなし崩し的な脱社会主義化の志向を隠しもつたものだということを示している。平和裡の転換を進めるためには、あたかも体制内改良であるかの体裁をとらねばならず、そのことがゴルバチョフの目標を外見上不鮮明なものとしたが、決して最後まで体制維持にこだわっていたわけではないというのである。

もつとも、ゴルバチョフが最初から脱共産主義を目指してい

て、それを着々と実現していったなどという見方をブラウンがとっているわけではない。ペレストロイカの展開過程における急進化については種々の説明の仕方が可能だが、ブラウンは、ゴルバチョフの学習能力を強調し、ある時期まで想定されていたなかつた体制転換がペレストロイカの渦中にゴルバチョフによって受容されるに至ったととらえている。政治変動の比較研究においてしばしば「自由化」と「民主化」が段階的に区分され、前者から後者に進むか否かが分水嶺とされているが、ブラウンはこの用語法を受け入れた上で、ゴルバチョフは「自由化」とどまっただけという通説に反対し、むしろ彼は漸進的に「民主化」にまで突き進んだのだとする。用語法の適否はともあれ、政治変動の段階論をややもすれば固定的にとらえがちな議論が多い中で、微妙な質的転換の要素を抽出したものとして注目される。

もつとも、ブラウンもゴルバチョフを手放しで賛美しているわけではなく、各所で彼の失敗や誤りを指摘している。ただ、それらの誤りの多くは、どちらかといえば戦術レヴェルのものである。例えば人事登用における失敗、急進派との提携におけるタイミングの遅れ——ととらえられており、基本的な立場としてゴルバチョフの改革観が不十分だったわけではないのである。こうした見解は——この紹介では結論のみを要約的に示したために、やや単純で、あまりにもゴルバチョフ賛美的なものという印象を与えるかもしれないが——豊富な情報に裏付け

られて提示されており、賛否は別として、それなりの一貫性と説得力をもつ。

ブラウンのゴルバチョフ観は以上にみたように、他の多くの論者よりも彼に好意的だという点で特異なものだが、その点を別にすれば、彼の「改革」理解は基本的には常識的なもの——ここで「常識的」とは、多くの欧米の論者と一致していることを指す——である。つまり、「市場経済化と西欧型民主化」をあるべき方向とし、それをできる限り急速かつ平和裡に進めることが望ましいとするものである。ここには欧米的価値観そのものへの疑念などは見あたらない。その意味で、よかれ悪しかれ「常識的」ということができる。本書の分かりやすさは、ある程度、このような常識性に由来するだろう。

\*

他方、ハフの著書は常識的見解に真つ向から逆らおうとする論争性が特徴である。彼は自著の挑発性をよく自覚しており、

「多くの読者の血圧は危険なほど高まるだろう」と自ら記している。読者に多大の知的刺激を与えることは確実だが、逆説や論争的表現に満ちているだけに、その真意を読みとるのはなかなか難しい。「もしこうだったら、こうなっていたら」という歴史上の仮定論法をためらわずに多用しているのも特徴であるが、その際、「歴史上の現実とは異なった道が実現していたら、その方がよかったのに」という未練論が背後にあるのか、それともそうではなく、ただ単に抽象的思考実験として、「こういう道もあつたかもしれない」ということを価値評価から離れて提示しているだけなのかは、必ずしも明白でない。また、随所にみられるやや奇をてらった表現は、文字通りに著者の見解を示しているのか、それとも論争喚起のために極論を提示しているだけで、実は真意はやや異なったところにあるのか、迷うところがある。こうした読みとりにくさがあるため、以下の紹介は、やや恣意的なものとなっているおそれがあることを予め断わっておく。論争的な書物であるだけに、当たり障りのない紹介よ

## 世界説教・説教学事典

原著編集 W・H・ウィリモン、R・リシャ

日本語版監修 加藤常昭、深田未来生 責任監訳 加藤常昭

説教の伝統、神学的考察から、説教壇に立つ説教者の心理まで、キリスト教の説教に関する全ての事項を項目別に網羅した一冊。

●99年2月中旬刊行 ●予約特価14,000円(99年1月末迄)

●B5判・上製函入・580頁・通常価格15,500円

## 黙示文学の探究

K・コッホ 北博 訳

黙示とは何か? 黙示文学をめぐる諸問題に、旧約学、新約学、組織神学等、多様な視点からみた新たな概念的明確化の試み。4400円

## 現代に語りかける キリスト教

森本あんり 国際基督教大学宗教研主任

人生の様々な状況での考え方を示し、キリスト教倫理のポイントをコンパクトに解説。初めてキリスト教に出会う人たちへ。900円

## 聖書は何を語るか

大島 力 青山学院大学チャプレン

初めて聖書に接する人にも聖書のメッセージを的確に提示する。最新の聖書学を踏まえつつ簡明に書かれたキリスト教入門書。900円

●電話注文も承っております

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ㊟03-3204-0457  
振替00180-0-145610 <価格は税別>

りも、「こういう風に読むこともできる」という読み方をくつきりと提示した方が、議論喚起のためにはよいのではないかと考えるからである。

先ず、経済改革の戦略について、ハフは中国型の道——政治改革より経済改革を優先させ、後者の中でも農業およびサービス業を先行させる、また正式の私有化は必ずしも急がない——がよかつたとする。そして、そのような道のソ連における推進者はルイシコフ元首相に代表されるテクノクラートたちであり、彼らを「保守派」と描く西側の多数見解は間違っていたとする。この点は価格改革問題とも関連する。ルイシコフらは行政的手法での価格引き上げを主張したが、ソ連の急進改革派および彼らを支持した西側の多くの経済学者は、行政的手法での価格引き上げは指令経済を温存するものだとしてこれに反対した。しかし、手法はどうあれ価格引き上げは需給ギャップを縮めて、将来の価格自由化の前提をつくるという意味で改革の不可欠の前提だった。これに対し、急進改革派は、言葉の上でラディカルな改革を唱えながら、実際には価格引き上げを先送りしたので、むしろ経済改革を妨害したことになる(そしてこの点では、ゴルバチョフもエリツィンも実は同罪だったとされる)。ここには、価格引き上げは大衆の反撥を招くという政治的考慮が作用しており、そうしたポピュリズム(大衆追随主義)が経済改革の実施を妨げたのだが、これは「民主化」の急ぎ過ぎと関連し

ていることになる。

この点と関連するが、官僚は改革に反対する保守勢力だという通念をハフは否定する。実際には官僚は多様であり、その中のかなりの部分が市場経済に乗り移ったということを彼は強調し、官僚を全体として敵視する必要はなかったとする。こうした見解は、ソ連における「保守派」の主張に理解を示すもののようにもみえる。実際、本書では、いわゆる保守派の著作が各所で引用され、全面的に賛同するわけではないにしても、一定の理があつたとされている。但し、それはいうまでもなく社会主義擁護論からのもではなく、社会主義から資本主義への移行の進め方に関する独自の判断である。

\*

連邦再編問題についてのハフの見解もユニークである。アメリカではソ連解体を自らの勝利とする見方が圧倒的多数であり、またそれ以外の国の、必ずしもアメリカべつたりでない論者たちの間でも、ソ連解体は「最後の帝国の解体」であり、起きるべき当然のこととして起きた肯定的現象だとみるのが常識的である。日本でもそうだし、ブラウンもそのような立場に立っている。ところが、ハフはそのような通説に正面から反対し、連邦は——もちろん、一定の改革を施した上でだが——維持されるべきだったという立場を示唆している。インドはソ連以上の

多民族国家だが数十年にわたって民主的連邦国家として維持されているとか、アメリカもコンフェデレーション（国家連合）ではなく連邦であり、州権力の連邦権力への不服従は許されなといった例を引き合いに出して、連邦の解体やコンフェデレーション化は必要なかったとするのである。

ハフがソ連解体を肯定的に見ない最大の理由は、ソ連解体は広汎なロシア人の間に強い屈辱感をもたらしたため、ワイマール・ドイツがナチ台頭を生んだのと同様に、ロシアでもファシズム台頭の危険があるという点にある。もつとも、将来が未知である以上、それは絶対的に必然ということではない。結果的に、そうした危険な事態が避けられるということもありうる。しかし、ロシアン・ルーレットが確率からいって六分の五は大丈夫だとしても、失敗した場合のリスクが大きすぎるのと同様に、ソ連解体もあまりにも危険の大きい賭だったというのが彼の意見である。

この連邦制の問題と先に触れた経済改革の問題の双方に関わ

## シェリングの人間形成論研究

池田全之著 19世紀初頭ドイツ観念論の哲学者シェリングの思想を人間形成論として読み解く野心的な思索の書、シェリング哲学の現代的解釈はポストモダン後の思想界と混迷を深める教育界に大いに参考となる。 A5判・定価一〇二九〇円

## 夢とフォーカシング

からだによる  
夢解釈

ジェンドリン著／村山正治訳 フォーカシングの創始者ジェンドリンが開発した技法による夢解釈のマニュアル。フォーカシング独自の「からだ」に注目することを核心として、さまざまなアプローチを質問形式で再編成。 A5判・定価三六七五円

るのが、いわゆる「五〇〇日案」（シャターリン案）の評価である。急速な私有化・自由化と共和国への分権化を特徴とする「五〇〇日案」は、欧米や日本の多くの観察者によって高く評価され、ゴルバチョフが一時はそれを支持しながら最終的に放棄したことがゴルバチョフの「後退」「保守化」、更にはペレストロイカの断末魔の開始となったという評価が多数を占めている（ブラウンもほぼ同様である）。ところが、ハフはこの「五〇〇日案」を、「クレイジー」「笑うべき」「めちゃくちゃなユートピアニズム」「不誠実」「馬鹿げた」と、最大限の形容詞を連ねて批判している。ゴルバチョフの誤りは、これを放棄したことではなく、むしろ、一時的にもせよこのように馬鹿げた案をもてあそんだ点にこそあるというのである。こうした評価は、経済改革および連邦制についての上記の評価からすればある程度自然な流れだが、ここまで強い表現をとるのは異様との観さえも与える。

（しおかわ・のぶあき 東京大学大学院法学政治学研究科教授・比較政治）

福村出版

\*定価は5%税込\*

東京・文京・本郷2-30-7/03-3813-3981

<http://www.fukumura.co.jp/>

# 二つのゴルバチョフ論

(下)

塩川伸明

前回の末尾で述べたように、ハフは連邦維持の立場を示唆しているが、そうになると、エリツイン・ロシア政権をはじめとする共和国の反抗にどのように対処すべきだったかが大きな問題となる。この点に関して、ハフはショッキングな見解を示す。不服従に対しては、実力行使を含む断固たる態度をとるべきだったのに、ゴルバチョフがそれを避けたことが問題だったというのである。ペレストロイカ期にトビリシ、バクー、ヴィリニユスなどで流血事件が起き、世界の耳目を集めたが、彼はこれらの事件はわずかな流血でしかなかったと言いつつ。そして、連邦を維持し、ペレストロイカを成功させるためには、抗議運動に限界のあることを示す必要があった、実力行使に責任をとりたがらなかったことこそがペレストロイカを滅ぼした、というのである。

実力行使に関するこうした見解は、政治的民主化についての理解とも関係する。民主主義は一定量の抑圧や力の行使と両立するの、ゴルバチョフはそのことを理解しなかった、その根

底にはナイーヴでアナキスティックな民主主義観がある、というのがハフの見方である（民主主義が「自己目的」化されたとの指摘もある）。多くの観察者はゴルバチョフが権威主義的に支配することを恐れていたが、実際は逆で、権威主義性が足りなかったというのである。

軍の出動などの抑圧措置をとったら西側から非難され、経済援助が得られなくなるから、そうした政策はとりようがなかったという意見も当然考えられるが、これに対しては、西側諸国は抑圧的な多くの政権と友好関係をもってきた歴史があるし、天安門事件後の中国への外国からの投資も、一時的には減ったものの、すぐ拡大したと反論している。そして、民主化には長い時間がかかるし、経済発展の一定の段階では民主主義は不適切であるのに、ゴルバチョフはそのことを理解しなかったとも主張している。この論点は、先に価格改革の遅れを「民主化」の急ぎ過ぎと結びつけてとらえたこととも関連している（このような主張は、ソ連でいえばミグラニャンに代表される権威主

UP 1999年 2月3日

義不可避論とよく似ているが、どういいうわけか、本書ではミグ  
ラニヤンの名前は言及されていない。

\*

もつとも、ハフもいくつかの個所では、ゴルバチョフがそれ  
ほどナイーヴな民主主義者ではなく、マキアヴェリスティック  
な打算ももっていたとの解釈を提示している。性急な民主化と  
みえたものは、党機構を弱体化することによってゴルバチョフ  
への党からの制約を取り除こうという打算に基づいていたので  
はないかとか、エリツィンへの対応を誤ったためにかえってエ  
リツィンの人気を高めたようにみえる点については、実はゴル  
バチョフはエリツィンを必要としており、一九九〇年のロシア  
最高会議議長選挙に際しては、表向き彼に反対しつつ、実は彼  
を当選させようとしていたのではないかという論争的解釈を提  
示している。しかし、党機構を弱体化させた後も大統領権力を  
十分強力に行使しなかったとか、ロシア政権を握った後のエリ

ツィンが期待に背く行動をとったときに、それに対して明確な  
対決姿勢をとらなかつたという点では、やはりナイーヴな民主  
主義信奉のためにマキアヴェリズムを欠いた弱い政治家という  
イメージを濃厚に打ち出している。

敢えて乱暴に要約するならば、私有化を急ぐな、官僚を十把一  
からげに敵視するな、民主化を急ぐな、連邦を解体させるな、  
必要なときには武力行使をためらうな、というのが彼の提言で  
あるようにみえる。それは何も、「市場経済と西欧型民主主義」  
という目標に反対するからではない（自分自身の価値観として  
「西欧的価値」を暗黙の前提におく点では、ハフもブラウンと変  
わらない）。ただ、そのような目標を達成するためにも、連邦維  
持、官僚との同盟、秩序維持が不可欠だという判断が押し出さ  
れているのである。こうした議論の最大の特徴はマキアヴェリ  
スティックな政治観にあり、ゴルバチョフがそうしたマキアウ  
エリズムを欠いていたこと——それと対比的にいえば、エリツ  
ィンやその側近（ブルブリス、シャフライラ）は見事にマキア

## 【新刊】 綺想主義研究

バロックのエンブレム類典  
M・プラーツ／伊藤博明  
可知的表象と可感的創意の和  
合、叡智と感性の交歓、技巧  
の戯れが召喚する綺想という  
イメージの象徴主義を照射  
する詩学の精髓。図 588 点

本体 12500 円

## スタンツェ

西洋文化における言葉とイメージ  
G・アガンベン／岡田温司  
中世恋愛詩から世紀末万博へ、  
〈ファンタスマ〉という文化表  
象を召喚し、エロスとメラン  
コリーとフェティシズムが織  
りなす西洋表象文化を脱構築  
する西欧最先端の知的営為。

本体 4500 円

【近刊】

## コルヌコピアの精神

芸術のバロック的統合  
G・マイオリノ／岡田士土居  
ミケランジェロからベラスケ  
スへ、ブルーノからセルバン  
テスへ、バロックという広  
大な領野をダイナミックに横  
断し、時代の芸術精神を解く。

予価 4000 円

## ありな書房

〒113 東京都文京区本郷1-5-17  
TEL/FAX 03 (3815) 4604



ウェリズムを身につけていたとされる——こそ彼の敗北の要因だったとみるのである。

\*

このようにハフは、ゴルバチョフおよびその「民主派」的側近（ヤコヴレフ、ペトラコフら）の政策を厳しく批判するが、それにとどまらず、そうした、彼の眼から見て非現実的な政策をロシア人に吹き込んだのは、多くの西側知識人だとして、後者に対しても厳しい批判の矢を放っている。これが本書のもう一つの大きな特徴である。

ハフによれば、西側の多くの論者は、現代アメリカの理論だけを尊び他を排斥するような偏狭なロシア改革派を応援し、旧制度を破壊しさえすればすべてはうまくいくとロシア人に請け合った。ハフに限らず、ソ連解体後のロシア政権でとられた「改革」政策について、その安易さや拙劣さを批判する議論は今では少なくない。ただ、その多くが「だからロシア人は駄目なんだ」という軽侮の念を伴いがちであるのに対し、彼の場合は、むしろそうした政策をロシア人に吹き込んだ西側専門家の責任がより重要視されている点特徴的である。そのことは、ロシア急進派はいまでは自分の誤りから学びつつあるのに、多くの西側の人は、彼らよりもはるかにナイーヴな観念をその後も保持しているといった指摘にも示されている。

ここには、アメリカにおける社会科学者の役割についての反省にもじみ出ている。ハフによれば、アメリカの学者たちは、未来を予測して政策を提言する「宮廷付き占星術者」になるよう要請された。その役を演じるには、ブレジネフ期のクレムリンに勝るとも劣らない複雑怪奇な「宮廷のルール」に従わねばならなかった。これは自己批判でもあると明確に断わった上で、ハフはアメリカの学者があまりにもしばしば「宮廷付き占星術者」の役割に魅きつけられ、その役回りが自分の研究内容に影響するのを許してしまったと、痛恨の念をもって記している。

\*

ハフとブラウンの著書は多くの点で対照的だが、いくつかの共通点もある。二人とも学者にしてはかなりあからさまに自己の評価を明示していること、エリツインに対して二人とも辛いことは前述した。おそらく、二著が準備されつつあった時期におけるロシアの状態（経済の急激な落ち込み、議会への砲撃事件、チェチェン侵攻など）が二人の著者の念頭にあっただろう。

ゴルバチョフ敗北の理由については、二人の見解は大きく分かれるが、いずれにしてもゴルバチョフが社会主義にこだわったとか、彼の改革構想が不十分だったというような点にあったのではない、という点では共通する。ブラウンによれば、改革構想は十分にラディカルだったが、戦術ミス（保守的な側近を信

頼しすぎた反面、急進派との提携が遅れた)が大きかった。ハフによれば、むしろエリツイン派ともつきっぱりと対決すべきで、そのためにはテクノクラートや軍をもっと大胆に利用すべきだったのだが、そうしなかったのはゴルバチョフの民主主義理解がナイーヴで、マキアヴェリズムが欠けていたからだとされる。つまり(そこまであからさまにいわれてはいないが、敢えて補えば)、現実を無視して過度に民主的であろうとした点がゴルバチョフの最大の弱点だったということになる。

いずれの議論も、やや極端に走って一面的になっているという印象は否みがたいが——しかも、この小論ではそうした側面ばかりを抽出したので、それが一層濃縮した形で示されていることは断わっておかねばならない——それなりに鋭利な見解だということも事実である。結論への賛否は別として、今後のゴルバチョフ論において、この二つの見解を無視することはできないだろう。

二著のもう一つの共通性は、政治家個人への注目集中という

## アイルランド農村の変容

松尾太郎著

一次史料に基づき、西部の貧民窟集地域と東部の先進地型農村の、それぞれの共同体の特質とその変容過程を明らかにする。大塚史学に依拠した詳細で綿密な実証的社會史研究。本体6000円十税

## 反戦運動の思想

天野恵一著

「新ガイドライン安保」を歴史的に問う 湾岸戦争・カンボジアPKO・沖縄米軍基地闘争と、日本の軍事強化に抗して運動を続けてきた著者の、この間の論文・時評集。 本体2500円十税

点である。これは、政治におけるリーダーシップの役割の大きさを思えば、政治学者の書物として当然のことではあるが、やはり視野が狭いように思われてならない。その結果として、政治家を何がどのように拘束していたかが十分明確にならず、とくにハフの場合、あたかもマキアヴェリズミックな政治家ならどんなマヌーヴァーも可能だったかのような、一種の政治家全能論が前提されてしまっているという印象がある。

ペレストロイカの一つの大きな特徴は、政治以外の社会全体の大きなうねりがいたるところで生じたことだった。また、連邦解体はモスクワ以外の各地での独自の動きによって大きく規定された。そうしたことを考えると、二著とも、あまりにも政治エリート中心・モスクワ中心主義であるように思われる。より広い社会全体の動きを、モスクワ以外の各地も視野に入れつつ描く作業は今後の課題として残されている。

(しおかわのぶあき 東京大学大学院法学政治学研究科教授・比較政治)

論創社

〒101-0051 千代田区神田神保町2-19  
☎03(3284)5254 振替00160-1-155266